

梅雨明け前よりの猛暑が続いています。また、突然の豪雨や落雷と東京の天候は熱帯地方のようです。これから続く真夏に対して、身体の準備を始めましょう。

心機一転「伊藤外科内科医院」

伊藤外科内科医院への名称変更も大きなトラブル無く終了しました。先日の墓参りで亡父にも報告しました。特に診療内容が変更されるわけではありませんが、心機一転また地域医療に貢献できるようにスタッフ一同努力いたしますので、宜しくお願いします。

夏風邪に注意！

ところで、様々な役所関係の書類の整理に追われ（私も年齢とともに明らかに事務処理能力が低下してきました。）この原稿は書いているのは20日となりました。

最近、発熱・下痢嘔吐・咽頭痛などの症状の夏風邪の患者さんが増えています。数日で改善されていますが、熱さで体力が低下する時期の感染症ですからお気の毒ですね。

乾燥した時期を好む冬風邪のウイルスと異なり、高温多湿の環境で活発となるエンテロウイルスやアデノウイルスが夏風邪を起こします。夏風邪も予防が大切です。外出から帰っていた際の手洗い、うがいが重要である事は冬の風邪と同じです。十分な睡眠と水分摂取で体力の温存に努めてください。

以前も記載しましたが、一般に身体的弱者とされている高齢者よりも若い年齢層に感染症は多いようです。お年寄りには健康を維持するための知恵があると思います。

甲状腺の働き

さて、日本の医学界には多くの学会が存在します。私は消化器が専門でしたから、開業後も消化器学会に参加していますが、数年前に甲状腺の学会に入会しました。

理由は、中年以降の特に女性の様々な症状が実は、甲状腺の働きの異常に由来している事に興味を持ったからです。

甲状腺の働きが低下した状態は、日本人の橋本博士が研究したので、橋本病とも言われています。症状は、喉の部位にある甲状腺が大きくなり、顔面のむくみや皮膚の乾燥、声枯れ、便秘、気力の低下や倦怠感など多彩です。甲状腺は、元気を出すホルモンを産生しているわけですからホルモンが足りなくなると、このような症状が出るわけです。

また、甲状腺ホルモンが低下するとコレステロールが極端に高くなります。健康診断で高コレステロール血症を指摘され、相談に見えた方から橋本病が見つかる事もあります。

この病気の診断は比較的容易で、さらに内服治療が可能です。上記のような症状や健康診断で疑いを持った方はご相談ください。

8月は発行をお休みさせていただきます。猛暑を様々な工夫で乗り切ってください。



院長

伊藤外科内科医院 HP

<http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp>

(バックナンバーは HP にて公開中です)

三弓先生の本棚 34



評価と贈与の経済学

著者：内田樹・岡田斗司夫

「ツイッターはがき」なるものを2日と空けずに送ってくる友人がいる。「ツイッター」とはご存じのように、携帯電話やパソコンといったデジタルの世界の中で、個々のつぶやきを書き込んで公開したり、知り合い同士でおしゃべりしたりするものである（この説明であってる？ 体験がないものでスママセン）。友人は50になったばかりの出版業界の人間である。なのに、携帯電話を持っていない。いや、積極的に拒否している。デジタルによるソーシャルネットワークに対抗して、「はがき」というアナログ手法で「ツイート（つぶやき）」を送ってくるわけだ。

書かれている内容のほとんどは、現在読んでいる本のことである。先日、それに反応して、「とても興味深いですね。その本をぜひ読んでみたいです」とパソコンからメールをしたら、3日後に本が送られてきた（「大事なところはメモをしましたので、返送は不要です。存分に読んでください」とのメモ付きで）。それが今回、ご紹介する『評価と贈与の経済学』（徳間書店）である。

これは思想家で武道家の内田樹氏と、社会評論家の岡田斗司夫の対談である。両者ともけっこう話題の人らしいが、実は存じ上げない。「経済」にもワタクシ、とんと音痴である。ただ、友人はツイッターはがきに、内容に共感した部分として次のことを書いていた。「これからは贈与する（与える）側にまわると生きやすい」「なんでもいいから、何か他人に贈与できないかと考えよ」。そして、友人の感想としては、「この贈与というのは仏教でいう布施に近い概念だと感じました」とも書いていた。

内田氏は凱風館という学習塾を、岡田氏はFREEexという会社をベースに活動している。ともにビジネスというよりは、「拡大家族」を作るための試みのようだ。本書はそんなふたりが、ポスト・グローバル社会における「新しい共同体」のありかたと、そこにおける財貨・サービス・知識・情報の「新しい交易」の形をめぐっての熱い対談だ。63歳の武道家と55歳のオタク系経済評論家では、立ち位置がまったく異なる。が、ひとつの事柄・事象をそれぞれの立場から見た意見を戦わせ、それは時折、違う道筋を通りながらも同じ終着点にたどり着く。資本主義の限界にきている現代、進むべき道は、「貨幣経済」ではなく、「贈与経済」だと共に語る。「贈与」は「お金を」ではない。もちろんお金でもいいのだが、それぞれが持っているもの（物・技能・環境・思い・労働力・存在……）それを出し合う、ということ。中世以降（いや、その前から？）～戦後の高度経済成長期ぐらいまでは日本のどこにでもあった、例えば、東京に出て成功した人が田舎から出てくる次の世代を家に預かり、弟子や丁稚として技能を身に付ける機会を作り、それが循環していくようなシステム。本書の帯にはこうある。「いま、私たちに迫る試練——役に立つのは“お金”じゃなくて“人柄”」。人柄を作るのは、お金を儲けるより難しく、簡単で、難しい……。「これから」を考えるきっかけのひとつにはなる本です。

（一弓）